

# 今から後、主にあつて死ぬ者は幸いである

【新改訳 2017】ヨハネの黙示録 14:13

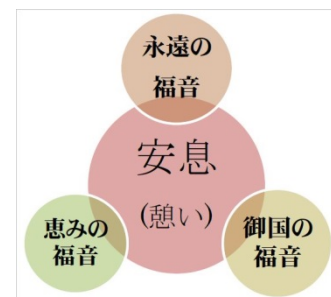
また私は、天からの声がこう言うのを聞いた。「書き記せ、『今から後、主にあつて死ぬ死者は幸いである』と。」  
御霊も言われる。「しかり。その人たちは、その労苦から解き放たれて安らぐことができる。彼らの行いが、彼らとともに  
について行くからである。」

●上記のみことばは、本来、「獣と呼ばれる反キリスト」による未曾有の苦しみが定められているユダヤ人、特に「イスラエルの残りの者」に対して預言されているものですが、主にあるクリスチャンにも当てはまることばです。誰にとっても百パーセント確実なことは、人は必ず死ななければならないということです。その中であつて、「主にあつて死ぬ者は幸いである」ということば。なにゆえに「主にあつて死ぬ者は幸いなのか。」、そのことを考えてみたいと思います。

## 1. 「安らぐことができる」から

●「安らぐ」とは「ヌーアツハ」(נוח)で、これはエデンの園に置かれることを意味します。「エデンの園」には神の「良いものが豊かにある」ところで、乏しいことのない世界です。そこは神ご自身が人とともにいてくださるところで、死もなく、涙もなく、悲しみも叫び声も、苦しみもないところです。渇く者もありません。なぜなら、いのちの水の泉から豊かに飲むことができるからです。

●「主は私の羊飼ひ。私は乏しいことはありません。主は私を緑の牧場に伏させ、**いこい**のみぎわに伴われます。」(詩篇 23:1~2)とダビデは歌いましたが、それはきわめて預言的です。「いこい」とは「ヌーアツハ」の名詞「メヌーハー」(מנוחה)で、「永遠の福音」「御国の福音」「恵みの福音」の中核にあるものだからです。「永遠の福音」とは神が創造者であられるゆえの福音であり、「御国の福音」とは神が王として支配されることの福音、そして「恵みの福音」とは神が罪の赦しのために贖ひ(救い)を完成されたことの福音です。それらの福音の中核を「いこい」として表現することができます。別な言葉では「安息」です。



●「安らぐ」ことができる理由としてあげられているのは、「彼らの行いが、彼らとともにについて行くからである」とあります。「彼らの行い」とはどういうことでしょうか。それはイエシュアとのかかわりにおける「行い」です。イエシュアはこう言われました。

【新改訳 2017】マタイの福音書 11章 28~30節

28 すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。

29 わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。

そうすれば、たましいに**安らぎ**を得ます。

30 わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」

- 「行い」とは、イエシュアのもとに来て、イエシュアのくびきを負って彼から学ぶことを意味します。これが「安らぎ」を得る行いです。「来る」ことも、「学ぶ」ことも、実はすべて主の恵みによるものです。そして、主にある者とは、主であるイエシュアとしっかりと結ばれることを意味します。イエシュアが約束された「安らぎ」は私たちがこの世で経験できるものとは違います。想像をはるかに越えた究極の「安らぎ」なのです。

## 2. 「今から後」に起こること

- イエシュアにある「安らぎ」の保証は死んだ後ではなく、キリストが再び来られることによってもたらされます。冒頭のみことば(黙示録 14:13)にある「今から後」と言われる「終わりの時」は、殉教した「イスラエルの残りの者たち」にとってはキリストの地上再臨の約束を意味しますが、クリスチャンにとってはキリストの空中再臨の約束を意味します。聖書は「終わりのラッパが鳴るとき」と記していますが、「ラッパが鳴るとき、一瞬うちに、主にある者が「朽ちないものに変えられる」ことによって、はじめて約束された「**安らぎ**」を経験するのです。それまで私たちは主のもとで、しばし「死」ではなく、「眠り」に就くのです。

【新改訳 2017】 I コリント 15 章 51~54 節

51 聞きなさい。私はあなたがたに**奥義**を告げましょう。私たちはみな眠るわけではありませんが、みな**変え**られます。

52 **終わりのラッパ**とともに、**たちまち、一瞬のうちに**変えられます。**ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。**

- 「永遠の福音」「御国の福音」「恵みの福音」が行き着く確かな希望である「安らぎ」の世界、「今から後」、神の定められた日に実現することを、信仰をもって感謝したいと思います。